

「わかる」のしくみ

◎西林克彦著
(新曜社一、八〇〇四)

「わかる」のしくみ

著書によれば、我々が対象をよりよくわかっていく過程には、「わからない」状態と「わかったつもり」の2つの状態が存在しているという。そして、後者の「わかったつもり」の場合には、ある種の思い込みを、自分で気づいて変更するという困難さが存在するという。

本書では、このような「わかったつもり」の状態が、どのように人々の認識進展を阻害するのか、どうすれば「わかったつもり」から脱出できるのかについて考察している。第1章では、「わかったつもり」をなぜ問題にするのかについて論述し、続く第2章では、日本語の文章理解の領域に絞って「わかったつもり」を再定義した上で、第3章、第4章、第5章では「わかったつもり」の原因と、その脱出方法、それに著者自身が身を置く学校教育場面での知見について、言及している。

絶えず「わかったつもり」の状態にあるのではないかと謙虚に自問自答を繰り返すことが思考を促進させ、よりよくわかった状態に近づく早道であるという著者の指摘は、現場の問題解決場面に接する機会の多いIErとして考えさせられる点が多い。すべての人々が一読に値する書籍である。

(坂爪 裕／慶應義塾大学)